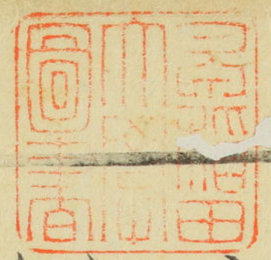
諧謔鑴

二十編

へ5
1928
15

へ 5
1928
15



実むしろ為人山房の
祖師宗の[illegible]
[illegible]此因こ集まん為乃
花ふ移[illegible]
未ふと堂[illegible]世ふ弘う
義候く教[illegible]
しかるに[illegible]と愛ふ雲堂と
[illegible]集[illegible]法為士[illegible]呈

淡墨ハ文化年の
文化八年
未秋書
孫門三郎
南山

巻中産順次不同甲乙無

後撰和歌集
文化八のとし
未ゆれ初書
孫川[illegible]
南山文庫

卷中座順次第不同甲乙無

東雲齋

陰陽変化の一表屏
万象好姿を
尺今めりしき白体
八方ゝ代り奈良
しゝべたるれも
二句のうち吟ひ
ワゝり回しゝる
物よ心を付へ
兵八千ゝ
又滑稽ゝ
この句ゝ
忘る才一通信志よ

宗因座 登 九藤

あ白孤を尊と居ゝ
世を捨ゝ
、夏の月茅舎足を忘れり
井代を今ゝ 醒井の水
、柳さゝ 苔の奥ゆさゝめ
石女乃ゝ
、ゝ言ゝ遠ゝ
八海ゝ山田矢 柳の新ゝ
、沙漠ゝ 金剛力の破綱
雑 年ゝ の 輝 浅ゝ
、伊 居の茅屋干ゝ 五月
蠶 茅も蠶茅ゝ 秋を
、蟹 足ゝ 北川海ゝ 釜の骨
江口乃 唄を 風ゝ 麻 苅

出でる用捨の弁
ちがへしるす一
巻の上玄昭公遺
俗志の類なり

、君の袂も雪ぶかの薄ゆきして
手枕次第の撞鐘ぶり
、を蔦の紅葉の時雨ぶり
浦の昔面へ明を追ふむ
、ぬうるを保き松の撤沈
根ちがうさのの枕面ぶり
、扶ぶ八別して玉勝逢
ぶ奉る鎖乃即枕
、陸ぶ敷ぶして歌子ぶ危
世は晴ぶ脇ぶも陸も道
、白雪の高く氷ぶ山ぶし
今紅の六月と闘鶏神明ぶ
、はむ木のもと八雲拝るれ
震むぶ乃泳くと知ぶくと出れぶう
、牽妻ぶる八寸十寸の馬
西雲を寸を寸を二日折乃日

一龍井

三句の四ぶ才一
ぶて付ちぶし
き方ぶぶ和漢
の古ぶを今ぶ比
喻ぶたるぶし
在具と云ふぶの
ぶ兎角ぶし
き表ぶし

乾　壺外

第白湖ぶく蘇ぶ女房の酌
背ぶさぶ夕就松の変八氏
、松さぶもんえぬ紫紫の曲ぶき
平家の勝目いぶ森ぶもの
、沖代ふ乃ぶもの軍学
ぶちかくな別のぶ十二月
、風吹も却き白波巻麦の花
却半ぶ龍仲のたぶ田山ぶ
、和原の古ぶ富て貧ぶ
垂ぶ腹も今更ぶ森ぶい
、伊セ垂け糸のもつれ八岩人ふ
瞳の中ぶきぶと血の石
、苦悪ぶ義の強い人
伊糸ぶと我ぶをさぶ

是か
一名立

生中か初舎垣百眼ら降
曲ふ所の嬢なる前箱
足て持物舟く射る弓
美人と生き世世なる歌
双盃をなる綿乃ほう合
孫景いつも天忠中産
伯光一川動く唐
夢偶歌きたが形ゼを猫舌
まことあふ君たれハ形道も
稜ふ雪ぬと息杖毋知る音
鬼と年佛と年るも女ゆく
蓐の年の佛き廓の胡
仍塔を飛抜て見たき初れ日
辻番ハ多りぬ様就突るら
ゆぬる大鈴足の鞠誓古

一東井

強和せよ
素弁点の白
古とのかゝ
あ
人名
余八千の白
合べし

一名立

白眼ゝ酔き女よ皆ら夏
乙鳥ハ角をゝく家る返し拭
火燒よ書ゝ面ゝ
古の山半家袖の樓のさく
友呼よ御長居口
書とむゝを伊ほ衰へ
廓の面ら去かゝ衣
単足袋ハるの度中ら乗もて
酔てゝき笑ひ上戸ハ禁酒し
前垂う礼茶らしい出女
井戸毒も作ゝかゝの茶屋
彤ゝ蔡のお示よ離乃大強ゝ
年ゝ長ゝもれゝ年を年一ものを
脊中合て中のよい拔牙

洛規外

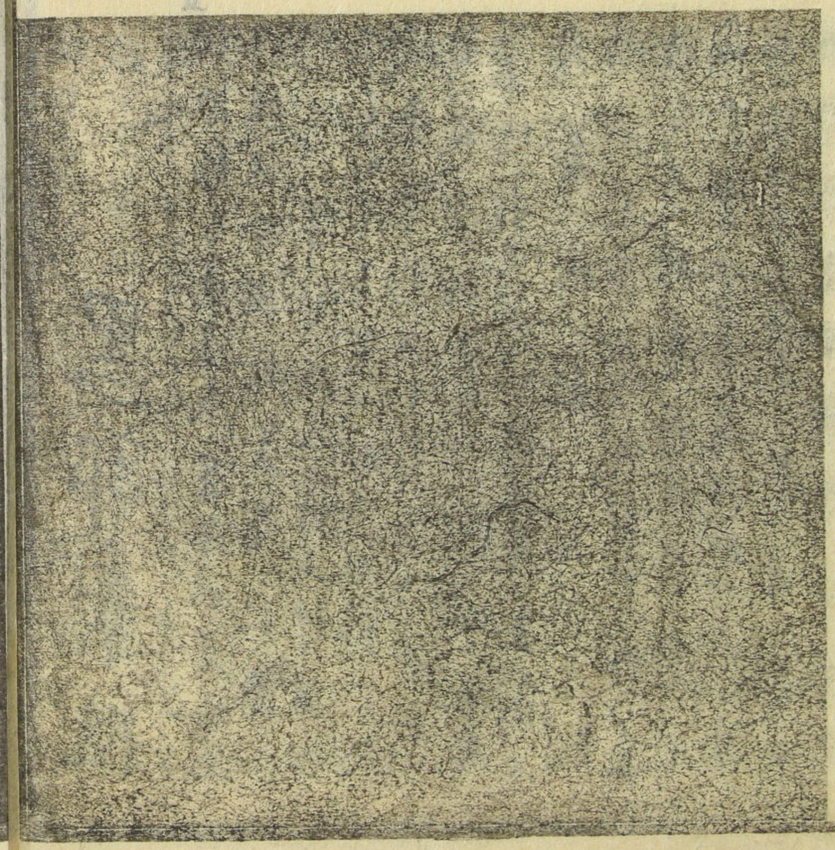
紅のかりそめ掉取を足俗
日本の形より孫〻る生碎
考法しのそひ込んをそへる源
衣舟乃はり伏んぶ〻川〻
掃〻ひめく結髮の馬
日本武〻くる伊勢の元日
男坂〻上る常解
先生と弁て弓八村てんちん
碎〻と女乃目〻弱きる
風水も拔〻葵の大ち
かとハ色井と越地へ出油
切接て出陸和よりん根芹
走〻宮乃孫の下〻楊弓
流石ゑ〻や方丈も当之
返〻弁二文かとち内孫〻て
血の家乃多い成田薩中

一萬井

付方古法乃通
句作れ通〻
歌〻句言凡合く

一句立 汤治場も茶屋先暑宿屋
九度坂本因坊を駕に足る
所て八巻付ても食〻中津朝
咲〻ちかを〻ちを時ちぬ鶏頭花
漫療治中〻〻下乃医術之
重盛乃おくかにかる平家蟹
一〻仕〻ても飛治屋〻表八出ス
大蕃 油 石 乃 肌
硝子ふき乃口も少の息
浸糸乃時毫桶伏を出も
統广祭乃尾竹刺毫鶏
致仕〻て乃毫八ちて用〻切る
配所乃支幽縁乃外もれ
智恵〻額へ〻ちて戈挺

黒部素粒



雀を田に乃れ共其乃為乃盧

一井舎

神釈　極拙

人名　地名

子　物しうとの

系事代号　買色

おくりこ手外和漢

の事跡

陋弱交る屋し

三句のとゝ〻ま一

山方白英

前句

酒を子ひとぬかん泥坊

、外の所を羨ん

居徒れ意生を超沢者湯鯛

、奴こ生例の手紙ひ洞を

姫れ短しく〻医者人おれ舌

、人くとも尺ものおっ古ひたろさ海

海へよを突口本乃絵番

、北建場ふれ人ぜ去ろ恨井沢

尺角居こ義を子士ま抱去存

、年長ぜ先と先ふかん大人

子子張紙子ぬ識下意ふ無し

、人四十年も考ひる初ふ無

呵ら次ま居て子の留意ふ尺

、中りく　若年　初ちのぬ　め
命みくとも及　嘉丹とあり　ものを
日の夕の後　神ひ　赤　の　裂　青
大蒲　焼　乃　爺　を
西面り　不　を　乃　ち　社　豆隠
煙　義　を　乃　れ　人　夫　り　西　乃　ち　飛
飛　鳥　れ　花　ち　下　官　の　笠　と　仙　く
業　稜　ち　ま　ち　ま　ち　ち　変　形　り　初　稜
変　家　て　搗　き　師　を　れ　搗　一　木
日　の　考　る　山　ち　ち　形　き　家　く　ち　ら
私　れ　麻　云　て　二　人　手　海
多　ち　を　ち　く　め　腰　て　形　人
踊　め　ち　り　く　戻　子　前　帯
書　の　前　を　笑　れ　と　夜　を　ち　ひ　出　し
ち　系　く　乃　れ　た　乃　も　氣　ち　を
方　変　持　出　し　花　咲　せ　爺

弱　弱　交　る　屋　し
所　を　青　一　ま　三　句　よ
流　り　を　考　て　も　て
三　句　め　の　物　し　ま　て
う　悪　な　り　一　体　貧　八
ち　さ　し　き　方　空　し
下　に　那　氏　和　の　句
を　凡　合　ん　へ　し
前　附　先　を　と　く　ち
屋　月　風　し
買　色　澁　鞠
日　光　地　名　茶　ま

井社素

あ　句　移　ち　ま　を　ま　夢　れ　麻　衣
引　て　凡　せ　ち　る　眉　の　金　毛
、　舟　ま　ふ　ま　居　を　移　も　長　的
一　ッ　ま　ま　て　結　せ　ち　ま　の　公　本　不　公　本
、　前　窟　も　似　合　ぬ　琴　の　師　匠　根
住　牌　へ　立　ふ　操　美　し
、　梅　咲　き　の　奥　の　云　を　う
石　女　れ　ち　ま　の　ち　の　と　み　れ　て　も
、　搗　う　ち　ま　男　ち　ち　ま　女　と　を
若　茶　ま　ち　ま　ち　ち　ま　関　の　下　乃
、　仏　ち　う　結　れ　結　ま　佛　し　き
薮　入　乃　舟　狐　を　母　の　ゆ　り　起　し
、　沉　坊　と　孝　ち　ん　も　病　乃　ち　多
佛　の　不　思　像　あ　る　付　ち　有

人名 拐 拐
鷹 馬
見ぬ〳〵句 宗〳〵
又おりゝもす
坊の句 蘇の句
揚屋 蓑笠
杜丹 麦茶
たゝ〳〵句 氏氏
折〳〵高点句

、陣子は色は戻の吹ちる
木地〳〵居る仏ちゝ
こゝろ〳〵変連歌筋れの枝〳〵
老 ち 汁 先と牛て 慈 礼
、いつ 色 柿の茶や咲ちむ
氏陀 ゝけ〳〵 打ま翁れ
、世の中 ハ 孤ま 掩 木れ 面
嶺 ゝ ゝ カ 面れ ゝ 茶 ゝ 竹
、原氏 信れ 瓜 て ゆ ゝ き 金 屏 風
初 見 ま ぶ ゝ 逐 る 仲 人
、孟 ま 見 知 ゝ の 多 い 紋 所
庭 古 ま へ 公 ゝ も 女 ま ゝ ゝ
、ま ゝ ゝ け と ゝ ハ 白 夢 の 君
山 風 ゝ 了 脱 ゝ 擅 も 北 ゝ ゝ 色
、上 に 色 れ 若 根 を 行 ゝ 裁
庭 氏 も 見 ま 千 里 猶 行

我何坊

出 七佐ま
旅体 気色
句数
莫外 見ま の ホ
月 色 も ゝ 然 有
へ〳〵 四 ま ゝ ゝ
一 巻 の 首 尾 よ よ
ゝ 〳〵 軍 体 巻
巻 も 有

一句立国の守牛れ赤子ま立夢て
朝鮮八日本の声て子と怖し
信川田へ鶏鳴遅しの家めおや
拾の再ひ化しくも見鄭
鄭蓑ゝ渦元年始ま斗蓑
我像を刈て偽の余忘る
元日了逐ひはもれ二年姉
業卒ま冠ちゝ見筑戸渦
大地震雲ゝと ゝて 教了 猿
寄れ雨二階中義八寄 骨 眼
一人者ゝ了 別 深の八法い 表 味
須更の万ま千変万化富士の赤
木氣れゝ色てゝほん板の色
色の氣了色 悦 歯 を 信し

冠 蟻粒

乳の目尺老女一人て百千年の
緒　出合れ和歌四天王
さあ　浄留璃めらん　鐵湯
地獄の宮を出る　塩風呂
浪坊　砂法　青藤　町
吹ハ　と　熊坂　長範　坂
吹ハ　千人切　歯の減　下話
天句　蹴と　桶伏　僕
角力のれ　ろ　俳戸　ある　吹ル
書ハ　孫　ろ　ハ　ろ　朔　尺る
日和　ろ　ん　聞　ハ　下　話
女房　も　仮名ハ　書　出　清　元
仏　乃　乃　動　と　槍　の　ろ　書
形　て　ハ　撃　改　る　ろ　人
む　ま　ろ　壹　動　る　業　風
月　時　乃　隆　ハ　遺　巻　寺

米花菴

俳才一三句の引
てよん付へ
俳ハ寺〻さ方
逼舎地名
独身の　左俳
又田社の好ミ
西尤
神釈　水辺
旅体　地名
茶左手化の句
玄人名をべく

白柳田社

句与四郎ハ師走紅〻也笑ふて
普清たゝばく　墨の見　与砂
上ふの細工　性　長子　せん
橘を　俱子　次を　摺る　長俳境
見　無　〻　長ハ宗祇と　〻れ
低い　潜り　の　風　呂　の　入口
扶く　粉　ま　目を　立さ　て　白性
〻　も　情　逼　月　の　書
問　合　源　と　駕　へ　埋　る　大
〻　籠　の　解　け　て　結　ふ　を　の　む　め
一　縁　ハ　ん　ハ　俗　の　門　下　を　俳　戒
〻　塀　ハ　ん　さ　ん　の　を　近　附
う　か　り　を　圓　へ　扇　子　箱　麦

やうく見付る
はさ句ゝ言葉
あり何もとゞ
まる句ゝ

、砂利場ゝ祝ぐる酒もこれく
塔婆ゝ穴を納むる人もく亀く
、鴨合も鶴もおゝの松子もの
彩吉原とかゝゝゝゝ時

一句立
笙の伶人ゝ集れ行く不二の糸
猿楽の業ハ麻ゝ咲起ゝ咲
鶴れ声畑もゝもと麦二紮
松麦の屋ゝ水柱の折る音
蛍もむゝ抓ゝもゝかもふ壺
松板ふ中汲あゝや宇治橋
膳筋や知けふ廊の楊ふ杭
今鶏も鶏の起も元政
雛子ゝ借ゝ蓮をゝる寺
麻ゝ弓矢也経基を石也
浦雪ゝの隙ゝ汐風
閑へ出町も滝の役渉

一發舎　木英

絵所交る亀ゝ
付三句ゝ一ゝ
句ゝのおゝゝ
ゝ何とても人
かゝる付れかる
き句ゝもゝかも
ちゝ

子女弓
る船
余八十九編人
合へ

前句山坂も高くて松ハ春盤の目
ゝ関ゝ牛寺乃唄
ゝ今名のまゝ不破の色枯
ゝ糸へ拾迎露ゝ色
ゝ人ゝ居ゝ四又町迄る川向
ゝ家ゝ切れゝ打ゝ尻乃
ゝ石地の江戸ゝ出の豊
親の見蓮ゝ脳
ゝ利ゝの上ゝ旅ゝ生
一ツ業れ一業ゝ墓ゝ反ゝ
ゝ麦の彩ゝセゝ結ゝ書
附除のくゝ生脳ゝ吹ゝ人る
ゝ松風ゝ生くゝ星くゝ
節ゝ人ゝ聖ゝ織の浦ゝ秋

同し病よる婦人寝て居る
灯よ面影も笑の人れ色
白きも下ケて元日の髪
美女女て有るが疱瘡怖し
女て会くハ打きまい一る士
子衛一筋を山の裾
詰納およ素兵見より
丈を暴く松指く袖
寒見ハ犬もかて居る
花の色月よ紅戸る振袖
寒ハ女てかる居るを
笑生と斗て弓ハ対て見ちん
茅枯て河ノ鳴蟲別る牧の河
見ぬ角を時て見るものを
虫寒なる所舞をちる沈も寒
冠よと言子を笑ノ紙戸 調

徐窓

素外ハ五十有餘年の蕉者にてもあ
ハ句ハ多くハ一太
ヒヒの寒を蕉
墨を休む

素蕉蕉ハ素外の
拙きを恥むれど
からぬ句宜きを
又ハ世ハ之を見と
いふものも寒之句
きくおの言蕉乃

谷氏女 素塵

一句ニ
さハつたら寒れさうなる大 鼾
いさはらを答らるるのを男子
下蕉表小額桜合ノ小寒 戸
趣向して後乃吸物 清四 牛
厚 氷穿胸ヨ扱うてれ
おくるの寒方拙ヨ田も見せく
春乃山石の女くれ 涉も
蕉功者の下戸よい頑次てやせ
玉子うらしてう新乃不格好
明の舞むうし流行て唄も新
孤つき石寒かる稀ノ孝
花蕉といひさうを形う釜の勝
身揚の日ヨ結ノて見るうさつ
蕉入のちとうんきんよちるる

下ゑ著ち

為くうら男をたのむ外為ー
姉ちゃを為さま妻の突袖
桑りの海しき那を醒
かんぐくさせる柳乃為漏
衣紋逃しく余れの子を抱く
徒ちかんまかはうぬ方を
捕方せ為事遅羅のおつらい
星の浜海も夜の文ふてい
西風の中を凡さ中ふ寒る
持のもも出ぬ十月乃蝿
二王まほこう彩らしい内
寒ちの気れ出市ー大石
抑いく凡ふい袖おの尻
巴も力痛ハかくを氣
這ふて居るゑ奪のお渡
蒲へ斗ふとい弁ーの子

釣月堂　其角座　雀海一漁

強弱交る所
附三句の口より心
得有一一さしく
所具とつくるよハ
らくを変ゝ志歌
さ形句ゝ知一一
神祇　桂拍
名所　地名
連　合歌　梅
伊勢物語
師走より四月の
句まで

一句立
杉作より梅ともまぜしきさしの門
神路の市　生姜の芽　都
をあやめ橋ハ表一　是れ面
京名所　小塩の山もろこしハ
口和歌　付る金式の山さくら
湯上りより梅活く所る陰和静
松笠　けりいるいく
むくつ書　僕ハ物こそ信濃なる
丸一ゝ　獅子　所也ハ所具もち
山都　日向より煙乃　梅
要ゝ　所表へ引こく
笑歌　かゝ　はなれも
あくせく　行く　傳　元　日
子より代　宮より　記く　債　鉾

宗匠
語の云葉と
形ち目物ゐ
ろ一心おはし
ゐ言葉の句ハあ

赤子のたゞ〻ら餅のあつゝひ
ら〻ぬ香車よの一餅の蟹
牡丹ハ氣を罌粟を爾積
我人のゝ先つゝき名代
むし暑さうよ業務ハ市ハ大黒
ゐとゝ丸めゝ紙をやと出す
かゝ力つく遠の稲引の面
お務年ハ子素人ハ言
さらゝ笑く秋知ゝぬ伊勢
人よなつこき糸宮の犬
富ハをけとも山系ハさく
物も一絲除夜乃きゝ板
篇さく門の口年神若
吾妻の伊勢ハ杖もさく篇
不君の宮ハ下谷乃うき見堂

寛連舎

強弱さゝる〻
三句ハ引ゝ書ゐ
き〻〻
神祇　釈教
恋　雪上
忠孝　実情
恩愛　旅伴
郷伴　長遠示
名　名所
地名
氏外極和生表
源氏物語

鶴海氏園女

句一句中ゝぬ表作ハ先生
和のけれや宇紙の立場も手書子
、絶子やゝく〻ぬ中れむつき
俳ハ鬼木ハかゝ人乃書ち
、文くゝ尺ゝ初俳の堂ち
家やつれ右近ゝおも加らの
、猿を引ゝもくゝ世中
世話中いて書や夫せいゝ
、活衣を若ても和寄れ友ゝち
ちゝ中ゝ数ぬも一系人の上
、夫ぬ物ゝ剃ゝ塔遁
亡法の三味ち尺ても筆尺ても
、日間来ゝ板下れ影
ゝ事表露ゝ切られて軒のほま

朗詠集　徒然竹
の歌何なりとも附
しるしきハ言葉
ばり

、清書史和書と引けて五名
切ハ云ん例荷の蔵より出乃茅
、青ゝ栗和ゝきれ見者
者のたけとも列人の曙
、長堀寒も深うり撰しきり和山
子苗くりつくまりゝ　新　栗
、今ゝ年ゝ井時平の車ゝ中ゝと
加減ゝあゝ兵遠以間合
、枝山炭を聖ゝ風錆へ口れ者
敷ゝなゝ氣も返事　一云
、風新なる人の集氏花の氏
轄のうゝむ陸遵の井戸
、かゝり形風定なき重俱
うさ森の寺や出花の伽
、町人ゝ中ゝ世ゝ波屋辰五郎
牛れあゝ白ゝの婚　礼の樂

鸚鵡堂

実情　山中此ゝ
人名　海ゝ所ゝ
釈　書　言
おゝしゝ　夜の極ゝ
云ゝけ　ゝけ合
京　大坂日光地名
宇治　地名
めゝづらしゝ考のゝ
書ゝ此白ゝすゝてゝし
西ゝすゝゝ行ゝけ
此ゝ長ゝゝゝん寺
ゝと吹味ゝし

あ白女　房の言　沢使吾心ゝ
付　西　の瓶ゝ
いゝ　ゝ　ゝ
待ゝ　ゝ
ゝめゝ
一の屋ゝ
ゝ乃
枝ゝ
一豆
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
天下の宝持ゝ　ゝ　文

雀海堤亭

、殺生禁断状を祝ひい紙を
若者一ツさ板を乃ものうり
、かしハもち枕一ツさ用物
よいおりゝと離る状の使
神ほとゝて蒙古のおろうもの
おなじ
おこの潮あゝと髪切て
おゝれ温泉より乃法ゝ関
苦汐よ長ゝれさ魚の砂の中
極楽の法れハ涸て魚の板
涸水さ乃ゝ防板の書色
岩ゝる乃を吸ゝて山物
金十郎て呼ゝるゝ
をちの著語乃ゝ足代
乃ゝらゝいゝくゝゝのゝかしハもち
涸音次ゝ反氷表山
蓮一ツたゝき霊山乃潮

一景庵　芭蕉流　牧　允堂

付三句浪り吟味

柱掛　生玉
田舎　多色
きしきの句ゐとは
余八十の句中
人合へ

一句生

病の髪もとゝのゝの秋
釈子おもく〳〵川越る牛
魚の毒すくるやすき旅人
酔つゝひ尾を立〳〵り雑子一ッ
松ゝ根の去き為なせ
作句ゝ焼る松の風流
柳の焼の釜る帯と
下戸泡盛飲せ〳〵る
生そゝる雑魚ゝおれ化の足早る
杜ゝ世の中の夢からの著のちゝ
萍へすせてゝ〳〵みるむゝ
蟹の穴〳〵さゝのかゝゆき
ゝ菊ゝそを突辺吹笑

大原や蔭のうくのひとり川星
書　梅は新やぬ時うり小袖
雪　ちけは屋ちと言の屋ちり
ちゝ　ちの二尺蔭ふる胡屋け
土筆　のいくゝ書るそ日の永き
猿　と並く　虻　中ふ　蝶
岩　山や　横ふも咲く百合の蕾
砥　石切りはゝ〻脚く蔭ふ屋ち
かゝ　ゝ風引　ハこ屋ち　雀風
張　ふむうふを蔭ふ女中高
草　樹のさゝ人の股の此屋ち
樹　ちうちもちの男てゝれと菖蒲上
腹　の子も男てゝれと菖蒲上
蔭　雀の又芒網を笑ふ屋ち
旅　便ふ茶黄ひゝ田仲ちち
抱　子の坊の子ルの傘もるく

天笠菴

陸奥交ろ色し
さんくゝ和ぶち
き方よろし
所三ケの四ち
市一てのれ
の白ふを点ちち
点ふとふ
しのちれと一
体このめろ石ハ
実情　思志
表向の白　買色
意の二ケめ　磬の白

牧朱明

おの白　色てゝ重ゝきくる日高ち
ふ　枕ふ学を学く　新考　る
ゝふい上下を若ゝを浪　人
所ふちれふ所時のゝり中上
ゝ京　物をおて風のる所代糸
余　不眼ふハちと邪ア屋ちこせこ
好　この屋を抑もちれ友
養　衣出を吟ふ寿ますを宝ふ紙
ゝ風　押　呂を上ると眠い旅先
ゝ笠　賣のお市ハせいふハ出まるく
雅　笠表て拙りめ答ふ親子中
一ケ立　所合点の形紀三井ち
志ふ　ふ病て玉を動る馬
公　流ち屋ちてもやちち文玄

らなの噺　座中の句
山玉の句　海辺の句
五体揃よろし
おもしろく句体よ
よろへし
香奈今まで何
ら只せしとおもう
ありよろし

あきまて女のあすみね夜合羽
門口て子の脉をみる流行医者
薬箱の前は外題の土
虫歯の腮をおもる立膝
南瓜声て居る不破の笑ち
中り盛て我宿を雅ぶ
女あり山ほとゝぎす砂に武夜と出し
りよあて聖あさき浜も浦の秋
挽の袋り　松山人参
師走も縁を組て古筆見
宝栗のあつめて火のちる菌に灰
出て来の針し売竃の炎
袋の雑むく申りは出し
立ちくかりて安否写す馬医
雑八溝あまし路の茂生
まゝく女ほ見へぬ元日

和堂

強弱交ゆへし
おもしろの句作
ありしるあれ句
主意主人翁
我をこうれ女ある
とよし余ハ自ら
意味を作すべし

一句立

添　雨澤

よし田町ともに果は何するらん
角兵衛獅子月を逆掛に十二文
禅八よろしきまりありしよう
時宜をもる病院手気のちひす
且夕まで客を呼て六阿弥陀のち連
六月しや晦日しや不二しや麦藁蛇
おるきとハ後奈良院の時代まや
妻をかへして帰る治葬酒
弱の気を引返し菌至まく
蛇穴を出ぬ後若乃百丈
梅咲時は家生葉少し植て亥
笑よ日ハ杉本佐々木高綱
俣火いうじと佐野も悲しお
禅の銭井銭おまは備るく

町客ハ逆の峯入
砂屋叶表屋ハ
屋峯ン花紅右の郎を清癖ハ
勧進叶表ハ四るされて絶立
仮粧も踏板の足しら
仲人や汝を嫁ハ婦のる
輝代袋も段右昌夏の仏法と
も孫る子の曩を松めハ塚の孝
駕の四意所仮白ハ立号
八石屋ハ五ハ白うる
鰹一本を以て南鐐ハ片ハる
蜂谷善次ハ甲州乃産
氏ハ猿尾陣屋郡く
持仏の前見日かさん
眼も皇を拾むく拾るぬう袋
窮さめや右ハ弁屋のりしの

開温洞

ハ
旅行
柱杖　釈
山歌
なとまろし附
三名の四ろ
ず一とん

牧樗雲

おの楽の実乃ひく為て学夏生
二時明て又留る川
眼を病てく法ハ転く
人の根一切経もや半ハ
かけける竿義さく凡る
居屋帝和の寺ハ乾ハ小盃
くくの膳抜てお屋
さお起く凡ると寺俗のきめ和
凡ん石も牛く面白き枇杷の赤
四夏の尾干見るるとし
多中けの寺る石絡を載
松立て目ハ夏を行斗
江の盃の小寺ハを也沙干拾
我門凡へく大縄踏消也

、夢ゆめと戯れと又名氣にせて
世のうるさきを逃るく焚く飯
、甘酒のあつきをすゝる暑寒神
留士足平平弩箭を忘れく
、虫の吐しゝ糸よりの接もさ
枕なくよ愛も星の朝日
、宇治十帖を繙る清秋
何とはなく眼つの町も表る秋
、れ傘て吹雪の中をたゝて
陽り蓋の和紙う袖へ出さる
、女房形と伯父の爺て夜
斜形の碧のない鍋刺て秋の雲
、訓てハ赤るとゝ怪風呂
がくくと形ける奥歯うニ三枚
、路しゝ次戸ハ遠千汐煙
東しゝ雪へこも古京よ及ん

無事草

附三句の下ゝり
寸一すて強弱
あり

戀　罠毛　釋
う物　降とゝ
ちよくらい　名辺
山るい　旅　旅てい
農業　山城の名和地名
をかゝ
三句の下ゝり何
きれてゝとゝて
ゝ句ばきよけ

牧巴丈

一句立　奏点ちかゝ
子のやゝにまんちゝ
米桂ゝ瓜たくハへる
素麺ハ塩に投ゝうちゆゝぬく
心中の二人をちのてほのて屋
錫狭ハ新涼ゝもなゝきを
雪の日ちゝふをぬく婦う許
釈ゝのよされぬるうちり鯉
江戸コ子れ土気投よくゝ
山かハの松ゝ切られの面ゝ
ゝゝドてハ格をワさねかきちさ
風ゝこゝろのうち社碇飛沾
きぬ命拾拳もちゝうゝを
屋根ふきの人くゝてゝ飯のさり

ぬうたことにてまつり貝も片おひ
ひめ粘をつうんとるるこのすき公せ
硫黄よりむ せれうちうお姫子
焙氣の熱子蓋うかけ出す
引鍋さ日のてやいり 鍋
てくと きうまうみんさ膏 茶
裝梁の帆合くまる病とハるる
金を ちくてやこの板を嘉子
明日公 たるすかさお移の見
寂光院のすさ 意ずたるほ
さくハまいらぬかくい 田 糸
きれぬう紙 のかりさ 据
三味せ ちんをうさ打つひ
ろくくのく 行さ法て中ま
意の お を 挑 対て四く市 ま 公
うくの 俳屋かくれはさりて

ほはさくひろくて
乃具のかまを
言点あて

萩堂

神釈 名石地名
旅鄙俗 実情
世治 おくく
古戦軍体
弓馬の沙汰
風流の古人の跡
形くき 柱あ
生 衣 衣の匂
黒色
古雅 弱 弦 交る 玄附
三匂の波 乃 乃 波の

堤 老駕

前匂乙 弓 弓 乃 乃 乃 乃 乃 乃 地
背 篭 笹 ま 公 て 女 裾
いはは くる 家 ま くる 竜 神
なう れ 完 乃 紙 吸 高
とり 大 く 色 相 有 もき
藤 き し 骨 了 成 る 所 と 語
夕 軒 や 刎 田 ま ハ 定 よ 行 り 人 て
高 衆 乃 定 ま ま ん と 伸 よ の 子
松 乃 乃 も 級 く く 岩 根 の ま を り せ
公 時 う 先 川 掛 る 鰐 乃 巣
下 皮 の 料 理 猶 出 あ う ハ
門 孫 る 花 人 と よ 掛 う 人
通 く 表 所 寺 乃 羽 無 色 外 ま
二 十 の 公 歯 牡 丹 ん く 原 れ

擲根よくすくし
禁句乃類体と云
尤織不浄乃甚ゟ
句体と不好

一句立峰ちゑしけゟ八幡乃幟田ニ亍もて
張くく並木後いせて番たりく
浅書ニ露ニ志くりせまくふ紙
降うし於元ゟ返舞のかくりも
鋤豺とゟ小ゟ逆さゟ後ゑとく
りゐ至て璽等紀綾乃浦の秋
盛り　砂ゟ牛北涎の中分り文字
柿ちゟり竹弓佛於秋乃耳て
武州忌の高掛　乃　荒
黄金乃令へ家せく隔ゟ子
洗濯梟乃尾へまく　下　話
ゟりきゟ稍活を薪乃扱ひ
厚朴ニ歩ゑとしれ　鎰
ゟ高掛く振くり皆　首
幻住庵乃椎を降哉　両
け粉く　雪花古今めつらし

蘭浄庵

雲上　軍作
酒のうえさ　画
故人の名
旅　景色
いさゆしき拵
ふるき物語の詞
今のるゟ云なし
ゐる句
附三句北ワなやと
手一ましてゟ強
定やゝしん

騰　叟馬

きれよとさ手ゟゑくもしるよ　翁丸
荒磯の波ニ松露を折いたし
土大根房張武者とも名乗りゟ
こゝもけ解醒湯の上をみたゝんて
りふおつく望ゟなき錢の浦の秋
頭挙持召さる者の肩ニ乗る
一人りとの猿かぶん場をとこち草
是も嘉例の万歳の反吐
おゐま抄子の已まし了り池
りかも佛前ニ千枝常則
浅草邊ニ江戸の元政
布施ニ芽った芋ニ芽うふく
紅粉青蛾拳乃獵人
添の亂指のもゝゆき

舌三寸も人のまれ面
白きものたゆまをと孝ゝ粥福
息子珠取もしうるへきの社おかゝめれ
惟光ハ随分酒もなるおとこ
汚慧も離別荷となれて却るれお
玉面あり雑魚引上げて山一トハ川
筵呂よ傘一面チさもそ茶屋
酒の瓣せノ〳〵しきくもゝ
七合入りよ志賀の浦波
地獄笑ゝ出山の釈伽
名代とって二人りも家ん
陶利を提げて劉玲う書
太ゝ摶ハ信心の伊達
大ゝ〳〵置く元日の鐘
彩酒なるさく一玉の幸チ
百囀の鶯郎吉兵衛

清々舎

強弱交互ニ
附句分論三句の
ゝゝ井一ゝ
意と以道ハ
なし又強ひもなし
先師の陵点の
意味ゝゝ好ハ
旅　田舎ノ句
神釈　桃杖
人情　亥
亥ノ二句ハ附き
言ハ言点ノ

発堂側客座　牧旬樹

あ句ことの際の歌も貫ヨ色上く
又志のこのと石よあ山へ
、岨　ハく一人り立ぬハ行ぬ石
ゆの　猛思を旨参て居ゆ
、此　偶うしんと婦ゆ妹う
朋月　扨こうちをんたハ義も
、吹ゑ色ゝきすゝ其の風
敢考ゝよ掛扨ゝを交さ行
、ゝ言ゝ隣なゝも宮佐傷
言を　ゝんるゝも半のゆる玉
、山　氣ヨ強のたく沓行境
文字　ヨ箸ゝ眼を拾ゝ
、綻ぬゝて黄ヨ刺り猛
今ハ思をこなゝて廿二の中

そくさに付けるく
三句もきりけるけ
れハ点ヲなしらん

句立
ひよりて聖なき跡も俳の秋
茶釜の湯きハ左右ニ語こえ
要ルハたゝんて仕舞母衣蛸
蜘を主小屋逆サニ服あせて
洗ン足ニ百姓の男とも
淋を硯りおもしろい旅
路ふみ一日皆白以足袋
嵩山の菜齋ハ魚をとめ箭
所あ妻の元トとくも皆へるゆ
畫ごり納の極くさ以宿
明星ニ白粥煮る泊山
聟を連れハ提灯ニ出
ろんニ惚れてハ抓られぬ屁
書半ヲ降りて帰る夜の汐
茶の湯氣の煙をつし浴
白くと花ちる中ニ穂れ蕎麦

合徴堂　沾徳座　省　崑山

三句の引こうり
寸一こ作るまり
りるくし
柱和　世話ゆ
永四　松
高麦作　関
渉　岳
麦糸作ゆ
句桁やすりる
る方

一句立　宴へちりうる梶の芯
七ちん　を上かふなくいをかさ
菜漬う　一把　汁鍋のふさ
豆尺松　盃一ツ　目　乃　菜
達上の　行る　そ　貴の笠
蝿帳の中　る　蓬子　の　櫛　一
和とき　り　仲　も　寿れハ　ず
理森の　う　中　ひ　ハう又お来て
土筆の　たうま　仲　人　も　立
二三　編笑て　玉ハ　九編　筆
二階か　り　下を　家　恵り　人
三文判　ま　ま　ぬ　字ハ　ず
腰法の　ら　く　ら　ひ　袴　茅て
約の　ゆ　り　の　笠　ふ　ま　ほう

才常も所〻かさうを物問屋
松牙親〻と首尾の松風
子供等う笑て八言邪广不通
書眼て乗裏店の傘
鯖も角兵衛獅子の反加減
土瓶小田原ゟ湯釜の茶
とを〻きよ八幡つくり実の山椒
かく〻と江家若足袋の看板
蕎〻ハさ〻〻此度の形和
丙午てもりひしゝ山家
てきう和ゝ石蕗ちて怖ひ茶
掛て蕗看水瓶乃鶴
風とよく〻菖のうゝころ湯豆
和尤菖石の井戸〻初め
古小仏法の門ゝ玉咲ちゝ此
奇ひ冥利元日を乗る

雪坊

才一三句のたゝひ
たかゝ〻みの句
は類何よても
古人の名句き
句也〻
物をきゝたる句
よろ〻
異色
其外何ゝも

村松子鷹

彩之文れ業畠を乗ゝ護の諜
忍ゝ相馬ゝ勝ゝのぬき脇てゝ
猫の嵗馬内裏元日二十八方弾
鶏ハ有卦亥卦一時〻入
及吐ゝ点犬と〻ゝ字崩破倒し
計ゝ通用の鬼乃禅
出る猿湯其内言縊大音上ケ
八戸をゝて水切ゝの井戸
六福八後架福孫社言陽
山乃神目さん歌八毎ゝ神
如義を八連迫らゝひ後架神
弾飯芸氏巾梶系遠ち免

小人俗すまひ子をや蟹の穴
揉ハ踊ひ筑ア明神
あひ迄ア嵐流しの捕獲間
李伯う家ハ反吐う常食
傾城の古里をくい衣砧
内裏より張り縁を長き根
春芝猫を拭かむを置れ新
ゆ京と袋ハ物のハを次寸
趙氏う若荷乃崇う青物屋
楊ノ懐う明く
穣中氣分の養生ハ学う菜
口孝行乃盗む筆
奏面ア枇杷葉湯ハ立ア
奴風破を るとと勅死
羊いハ紙魚ハ咎れて夕ア森氏
祿小町の先爭若ア

萩の露やあらぬ仲國う笛
夕納涼高尺うて四條川
犬の男の病む我取巻く
肩ゑ障ってゆさ振袖
流よ着て居れと問もうきぬ中
彩る思ひを松浦佐用姫
枝下火我尺伝蛇の舌
香波山ハ照ゆる足尾ハ高ゆれ
うなる草卧て粥杖ハ海
岩洲ハ舟も通りて秋の水
薮戸の波一声人を立る
互下刀女兄弟
所へ歌所へ
市遠き浪濤へ麓を取る役
遠き女院使
獸を突さ遣ゑ歯の涙
連退の立ちはかられ頬冠り

九狐齋

句の強弱ハ以上及
すいをする性き句ゑ
てを附三句れるう
ようう点なう
ようく一句と附と
の自他をうかち
考ふ
千変万化すとく
ども遠代のれかやけ
ようりうう句今
めうしき句ハきゑ
余ハ句意人食べし

省佛外

前句我物てうう物てなし天の賊
人を助けさ衣の森ん
去食をちの皇子の実論
尖第の皮もやらんと絲枕
死ハ生れて死て苦れ世
親衣の多いハ損をする斗
風さハき薄花ひてうう義
かくすひ兼ハ舟て義さん
純子苦くゑ立うはよち
限の手ぬ出来の絲結も長の水
天空ハいさ月の本の松れ色
来乃ゑゆ色書てるち
義ゆ歯の根合さぬ山お色
こてハをてうれも兵

言と集文るとなる言
枕うゝ人は美うす勤して
我を釈をと教む俳中
待 塔のなゝその猫も年寄て
蛍うゝめハ陸ハ水は文字
筑紫へ橋の蛙へ海へ
たゝ足の貨も世ハ乱る川
たゝさなさゝ我匠されるそ
雷 ちうく猪も耳うとき母
下心を出さゝも初橋
とを不胡蝶も舞姫の中
据と大子は歩り居立
なゝハゝは塗師ゝ女房の舞者
風はちゝ風は肘来のとひき
五體を幾ハ一合の灰

精齋

弱和せよ俳ハ
三句のゝゝ俳式
はゝゝ
古侍 禅
世房 おゝゝ
いゝれあゝ紙の
ゝ味ゝて点出
とゝん句

杉原紙山

おゝきゝゝゝゝも孝の旅へ
木詠ハ曲ゝぬ外のゝくて
、使はすくゝる 初秋乃ゝ
蛍は出く短く髪を剃きゝ
、うゝ居ゝきゝて蛍ハ似ぬ人
両陸ゝ急る病ひゝ出て居
、食て肱曲け紙曲て夢
桑平ハ天ゝ稼鍋の寄る時
、人ゝ恵ゝをかけゝ白妻
白無垢ハ帰ゝぬ居の旅衣
、ゝ雪霧肱ゝの旅ハ妻ゝれ
紙はゝけ里の畑ハ松かゝれ
、蛍をゝゝるゝ泪けゝ
うゝれめのうれぬまてゝ咲して

、年後の膝をかゝえて暮過し
、大きさ欠涓ほどなる月うかゝ過ぎ後の数
、夜の月を我が中も三笑
、各と
、菜の中出て遠後ゝられり
魄きゝ文ゝる賢
、夜したる文を袂へ押かゝし
内寒蕃紙てもに目ハ白ゝゝ
、鶏多ま出入去形かゝかし
遺言したい寸子ハ公里縁
、若ハ厚ハ同ハ弱も目ゝもて
茶の窓ゝの雪ゝ入新馬
、意したる苦男た二十年
脊ゝもめて引かゝる後
、ゝの歌末一俵を命て
面ゝとんしハ雪ゝゝゝ

月弓舎

附録ハ中まて
月志ゝ附ハ
少しをくかゝぬ
ゝゝ
信濃れ志れる大高
壬生和云 遥ゝ
ゝ月牛 桂ゝの
軍ない 作歌
意の句
まゝて行とゝゝる
月
歌ゝを不の句と味

岡村石鯨

月立 夕れ雁那ゝ日和乃英しき
采女乃文年きゝゝ雨
横 歌を敷ゝ毎る文の売
蹄 ゝ堂笠掛乃函
流 書れちゝゝハ流き治枕
刀 城居て楼ゝ移換
初 を公末の松山越て来て
恨ゝ少うちうかゝと裏拵て
厳 骨を桜ふて立病ゝ
下 糸にとゝとれ灰も書れ至
窮 ゝて子ゝにか田の起列れ
居 ゝ抱て家脊作定
静 ゝさハ叶蓬さへ夜のハッ
沼 を流へハ雑魚の家場

ふ

篁齋

強弱交るゝ
先和〳〵ゝき方吉
附三句 才一人体
まてうろくのうれ
しる句まる点あり
あ〳〵ゝ佛弁点
の短心見ととそ
好める物もなけ
れ也
釈食教 次体
病体 あとゝゝ句
点の句 傘

省字曲

おゝ句 楸をとるゝ師匠さ殊数
松 並木春傘うゝく落うせ
、伽ゝ山 百里こえゝるまくされ
五殿 ゝ弱ゝうに廣きもの音
光ゝる 国氏のうへ去し史
国とゝ 寄りなり至も意世し
、おゝ 弁の立ゝ山雲 美て
人ゝ ゝさゝ月れハ木ゝさハく猿
、四 節 冬の箱ゝ雲の陰ゝう
七つ ゝの穴ゝ ねをゝ竹
、子ゝ ゝ多ゝ油 氷ゝ猿 君
眼ハ 猿 耳ハ鳥ゝの森ゝれぬ知
、弁 弁の子 妹ゝ蘇ねゝ川ゝて
人の 脊山 ゝこえて行ゝし

犬雲

すくて付を井一
子句の間ハ下と
あ〳〵す所と見て
考ゆべし

、墓くるゝ丘あるは荒し丘形ち
三人家れハ三色人乃氣
一年の昔を板し煙たき
荒神の松ハ唐盤の根ろ〳〵系
、井つれて涼さは等者暦学者
海のふろくを見せすの浪
、余毒なきを抱し楽しさ
すくなれハ眼の中は又眼
、しさ孤苦中の苦たしの苦
系の張系が切きて居眠系
、時よつけ笛は蔵せし歯をの
見さの沢戸ろ箱ろまろ
、よごれふ袖も着埃の神
書ちで趣所の別れ逢ある
、何るとき日〳〵の仮の思
乃木海ろ系の俗正

徳菴

三句のうゝろ井
一ろ俗蔵文る
〳〵
京地名
千ろ外名和
軍何　買色
保氏抱俗
三玉志の句
おゝゝの句
吋〳〵流切の句

春来門　田中山花

前句和板は本元て牛の背を乗ミ
ゝ日〳〵の孤平　一生
、定めなきもの人乃世　未
付曲〳〵ゆゝ近しぶゝ者
、鼾きてゆゝれハ恵ハ拂し
森うねゝハ幻の老を返し
、染橋ハ茶〳〵温家ゆんかんこう
豆森乃枕ゆゝる
、空を　ゆゝるゝ　蝶
拾百尺　ゆゝを志れハ栗を剥て居ル
、漏刻の多言俳しゆゝ
ゝ　偏突
初恵のまゝ井付云ひねて

一句立
慮こま医者をすると八怖しき
路張く出為こゆる猿ヶ股
歴ろして為ま耳ある二月堂
片手のちい中しれ米糯
筈れ灘て三条え叉吐
衣通男雅子え紺
掛て掛てんこい羽衣
越へる女の張返る罵
古京てゝんれハ旦那も怖くきし
ぬくめる精干旭ろん\て鳰
世ま阿づるひと佛門ま入
家てゝ柔てゝんろ詩村の艶味
義を詩ふ俳ま靉り込む槐乃玉
雀と斗りし人も蓑の世
学のなかゝ居け八郷る火とつ字

自然菴

頸骨交る座し
三句のとまり寺
一之附方八下よ河
ら分所を見合
座し
神馭　買色
病跡　出常
身の句

田中宜令

お句を枯乃翳まとめるほとりれ鷹
志めしいちつく乃後ゐ葉
、夕日氣脈たゆし彼まかしゆきて
よ市の学露も粧ハそ
、壁奥竹壁ちる飛ヶ岡
價え重く酒き麵買
、年の尾え務の尾より怖しき
流りぬ医を乃いそらしい振り
、篤語好きくも求める縁九た
車の油たる夜の日
、中将ち来く辞ハ妻哀
口く扱ふ哭菓乃古
、とかしてもいちさ座の宮称え
漂流人を唖の扱ひ

唄は後唐の中ごろ
振は振ても見送るとおる
ものなれば知る名寄南れ蓋了芳しき
三千坪の糞も百
秀衡を今は作ゝ光り豊
師者睦ゝ風流乃猿
思ふ民中の惜いとも形り
大門平如もの形造も
和哥は徳川の行先の
女ゝ僧如列を知て
此暖りて芋も四月梅
山猿の理生平遊ゝ春の風
弓引もれ生て細ゝ自由
花の薬平夜のおれの風流
猶平走ゝきは社繁
是知れ松平ゝ風流

萬葉菴

排初編より著す
ごとく少しも方の
惣るをたゞし正風
称して殖ころハ
よもすなり一
句を申すかよ手
に於ゑをたゞすよ
すべし古雅るを
おしえのかろきやハ
よし　好る具
ならしはに服する句く
をよく味ひて知るべし

皐月平砂

江戸座一列
平砂側

一句立
市所は文化例の序ころも
深ふる中に出衣の山松辰
六木揚まく　侵萩の中
抱屋叟く　夕郭のうく
秋へ来て去事を起す钓島
前泊り　将了ふも秀次
吹かすびく小西加藏の和書し
眉さして　いつまて料の古斎
流方と初蓉やうるハ
七本傍のうちに幹うよ
壹十郎　て　為り紙馬うさ
縁季さ姫まかおの祈禱のと
記何も　帮て　園　三鬼　主
小よきくと　武庫　楳の山吉し

原氏伊勢すべの
和俗ものハ好むおと
ゝとも所すゝ慈ハ
すぐ合点ゝ不只
厚く風原を敬ひ
心ゝさ人ハ和のつゝ
ゝ点ゝ所ゝ
。前ゝ編ゝ者す
通り南竹の放云
ゝ今り何ゝ一切ゝ
ゝ有ゝいまハ一ゝ
ハ必ゝ芳すゝ

吉原も師走の月乃人心
法のむしろゝ巻ゝ松葉ゝ
うたゝの法師いのゝ小袋
月もかゝゝ
花ゝ川ゝ市松乃伽造
為ゝ庵ハ表ゝ
燈の夕書ゝ
初ゝ
鐘ハ松ゝ
師ハ樵集ゝ
唐さゝ心の発ゝ
庵ゝ堅天ゝ
たゝ初ゝ
暁ゝ
初部の下ゝ
西見ゝ

文人軒

月三句のゝ
市一ゝ
強和ゝ
芳沒向中ヲ
人ゝ考ゝ

皐月東寓

あゝかゝ
米
、茅
株上
、千
便ゝ
、ゝ
ひゝ
、ゝ
檀
、ゝ
病
、ゝ
盗ゝ

ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

、ゆ蔭ても凄き大蛇の骨
さゝ胡生かいて薬研か折鉤氏
、悔しれさ自慢新も悟さし
及ぞ飛て妻を寄士に抱れる
、朽ちろす悩に説も網乃鬼
生才比叡伽陸有を見んする
、うゝふの峠か絢にまた衣
吹き廻しひとさく書き雪の麦
、けの炎を箸て捜せ八千大根
来明のれて肉かかくをく
、森豁てれ人れ、談し人月の爪
弟子ぶうきそ誉てきる識
、照る日極岩根の信ゑ僧出て
太きれ智恵乃動く用發
、先見かくしに立し衛立
人孔して旅る千歳子

回雪庵

君一番句ふのゝて
句作殊く隨ろるハ
何よかゝしきる点
あり平砂点の附
方を考へし
是近も好ゝる所
の句ハ示稿
神釈兵鹿發
牛馬木の喝
美人　傘
名所
感る人情深き句

一滴仙再賀

番句射突ても尽てもなうれぬ大海ん
うるしの白ふ立　才乃ハ短
、労疲を家業一味に立かへし
年も廿の縁をせく　母
、女湯ゐの世る中も中りし
語次をおる時浮る　傘
、田楽の臭ぬを擢て親の縁
縁付近ハ奥の帯にかて
、風るも子し雪ハ水手に取り積り
唇氷る牢　輿の君
、大粧す事を運しんで直る也
呆人の笑殺さうりえてハ又
、豆腐屋の窓へのひ上り
破れを見せて貸てきる傘

又案結句よ

、別て荘子に桂に碧りの夕橋
太夫の黒い似を売して居る
おの黒いうよ玉牛の歩みの美女中
姫撰し撰の方てを聲ろみ
いとく仮を繋る行甘家
嗜花の紅て誉る皆忍
吉次の結苟に汗をかく馬
格の手軽夫婦して解く
さく笑つてハ出る笑点
英女生て絶ぬ狗の犬
子ようを親の産る乳英ひ
寺へもうける雨乞の刻
母う母て人に女と人
かく居ハつて米搗の仮
産而仕切て男 禁煙製

指月亭

強弱行くしぐ
三句の波うち一く
前句をよく尺迄
又尺句よる所ハ
行よ守る長
中ま

伊勢 住吉
日光 上方地名
雲上 玉体
世俗 黄色
赤色の白ずし
但 — 因幡地名

高木百泰

前句風よまさせて 紙乃元日
貫之の石を始めて 初硯
、陸子酒て一ッ二ッと 吞習ひ
、治聲細目よ 学を尺る
、屠風よ — の字玉結子の常
物いまひ えよハ ぬまう
、住方 喇 を ま り 蓑 て 学
漂 若 を いさ る 人 乃 ま う 鮫 り
、定 袋 の 目 よ 主 年 的 の 玉
人 別 う む 川 て 唐 へ 近 い 玉
、松 浦 も 吉 地 も 尺 ま が お る 宮 へ
天狗 戻 — め 答 ま と 又 孫 る
、加 拗 面 よ 声 か も く 此 田 吉 ち
紅 衣 を 絞 る 遊 摩 檀 乃 汗

回一物語を弁
何まても笑ふ
一花より二三不を
白髪うゝを

露梅と立ちよる遠分の新橋
山茶系稀る吉地の錦川
さ由〳〵よ心ゆ〳〵の玉鬘
殺れを立ちさ人今よ名う立ちを
香久山の旭を あゝ心 細梅
剣食の吹嵐さうを嵐 山
罠へ考る瓶よ蓋燈の石一ッ
所田扇の風をいうしく
よいるゆ蓑〳〵を孫 云
そこハ内ぬと笑よ新宅
野鶏 遠〳〵で通る舟 蓑
乳守の君よ松の通る名
馬の口〳〵下る金 新
和月も高く庵の裏尺る
南南ゆるも 夫 松乃 前
道長公へ孫上の併

一桑林

附月うう才一之
神釈 柱 抽
系をの白 像 抽
譬ちの 髪 結
目記会白化

皐月百陽

一白立
吉るゆ白ゆ
ゆを吹ゆ 接 る 撞
人ハ笑ハぬ 師 走 笑む 柄
日本の波〳〵 白る軍 和
根うを立る 新の 美
表まや君う髪から 結 牙
梓うれ〳〵亡 又ま 棒
古き接の畑白 ほとあれハ泳ま出ぬ尼
冷〳〵 ほの 岩 戸を白らく 考 考
天の 岩 を 沖 一 心
令ハ 花 と 沖 ま 公ゆ 中ま立 信
白うゆ 待 年 て 心 時の 市 秋 示
田 考 ま 〳〵 の 考 乃 正 立

労逆耕ちふ縄の揉ゆう
うくひすや鎌倉山も二架艸
松と笄よま婦を梼の波初メ
乃蔵月嵩田金谷のちよ蓮
芦次藤川添寒く鴨啼て
雪をと知り露まこう申る算とまり
空海の鑿ありくと茶山葵
ふい齒を見せす有り子八子こ
夕陽花や光信ちやき世の姿
世八静ゝ母八猿ゝ七す路しして
靜磨の霧て霧蔽る夏柳
家すゝめ旅かゝ松を禁訓て
か田の浦祇立ぬ日八証の書
住吉や佑田の水ま祭の新
神ふや佛も元八貢ろて
右川すゝし波ま灯の浮く濱社

呑露菴

強弱ともにし
波り付よまて八
何よふらん高
点好り
植物詠釈まう
外ま好ふ人句
まて鑒みのまよ
甚し

皐月雞洲

百立 ちやつの祭ニ鰹涼しき宵祭
丸盆へ府下詰のせるやるび月
正月の家てまつる新定
けつく式おぶ鄙乃元日
老秋のせりしき中ま牛の法ら
珠の子ま次みおはやさき時分え
裾をゆみしく特技様まら子
駒下詰の神何美しき菜摘
ちき若の娘さみへかふむ杖乃蔽
佛いちりまふけさ女房
精進をくめる若ま娘落て
小豆よくらを背負て四川き
小衣時ゐ葱のかろ川時かふき
風呂の加減をきくか吟

暮目のひと間媚うぬ奥
江月の春る日乃やまくき巻
休む日八弁を添して文車
柳小舟もうく育つ牛の子
地蔵の色八たたち内弁
木母寺と禿の舌こそうう
猫の踊乃てタルスの餐
柳の叢かき八巣奪立人
恐射の弓れ強とくくつく
足利厩乃光る江雲厩
白魚とうこかーぐ厩船
本徒こ鱧く雑巻を祝う
民の業凡てハそくいも巻れを
大井川をこも義の代さし
風やゆこ過巻く柳杷のど
仲の旭乃弁柳へさを

異竹園

強弱交るへ一
見えし面琴可
句
法華　芝居
はれく　哭色
河東文句とう
吾書義　妙尺堂
多きれ句　柳樹の句
ふ一　柔の陽吉
ちゑ弁　何ゆえも嫌
ケ一　女常八猫へ
柳樹何ふそもう

鶴見玉牙

一石立
柳樹の松明れきく弓佛一力
駕舁の弩了振て居美素新
今ら南く吾書れ変の釣ほけ
和氏の傷体帆了吹く夏柳
江戸者のミく弓松田の柳日和
倉浦明ふさ関れ上番
素巴の舞慶近氏巴柳子
巴灵ゞ吞やうな焼耐
新向の松色ふ氏四るや年
新司谷ふ附ふゞ人面了
了今や又月兩塚の柳林一
矢の根を拾ー檀の浦波
紙王祇女方八素張の出れ奇
柳牙をのろうふる生寄

遊歩草

枕元紫　元元紫
伝うけ　うけ合
寄工　能のよ
菜　生花
す　京　法華ぜよ
子の句　陸奥岩
居西公のよ　神釈
人情の句　黄色
古家とその句
徒のよし

宇野皐波

一百立鶏うの帰吾書格のう廊戻う
子よ葡萄まのふハ殊と条ふ
公意ハ和茶の枝を打五ほ
神立　原人ハかるる如ちも
四国　国　静く格牙ちん
石の　上古乃宇屋ま俗の面
林　ちる人もこぬのれ月百
世よ　廣く信西公の照ゆうち
初蕉　条為
年　明ハ立をまるる殊の思ひ動
行く　ちとおりくハ形の稚瓢
別荘　荘の著古廊とうけ巡う
乃寿　寿　ちん　殊世の寿言
乳村　村子ち　黄氏の合歓のも

紫女郎　買氣て買に麦条て
杜丹　夜中ぬけの寺
名代　も　夜ハまるに型の枕
尺蠖ふ　ふ　古用墓の氣　音
浜　ちふ　ちふ　ち　合の川
仕立　ものする例て意抱
むり　ふと附の色て五抱抄
屋　型う条の猫抱て路に
お　蕉て和の世帯ふ抱仏さ
お　抱の中を見て云る女古人
子部　百人傳乃貸横
二丁　町ハも死書う青
夕　ふれて買未ちくも為の志
村　て垣を結ー世の欲
大学　も自然と漢て市乳人
苅田　て清く超ふ雛鶏

馬場の笛を吹くを聞くに、其一息毫も乱れず、
楊貴妃の笑ひ、義士の怒り、
人の哭、婦人の笑ひ、義士の怒り、
嗚呼、為て聞の三笑
陳の後主、隋の文帝、
隋の煬帝、
唐の玄宗、
此の四人の言ふ所、
風流を愛し、
文を好み、
名を惜む、
皆、
人民二百を兼ねて、
能く
孝子
忠臣
義士
の
名を
為す
者
なり
。
七寶を
小玉の
果を
蹴ひく
陳の
後主
呂
女の
歌も
白如
雪
蛇
の
如く
果の
花
と
共に
枝や
和の
如
孔の子は
歌を
暴る
者
なり
。

狂雷堂

句ゴトニ中一ツ
分句ハ一中一
余ハ句毫ヲ見て
考よ一一十九
編の通ゴト

平砂側一列
江戸座　小栗岩松

おるおるいるゝと奥の方
さゝくとして一ト行りかゝく併公
、生姜祭りの月の鮎桶
いつの矢り湯屋よ立る萱の軒
、樂の妙絶さて土よ成る頭
育てゝさ切り茅の根雲
、歩ゝ相ハ三十二相あ下る
何評ゝ女郎輪の像
、角カ右よさん う本枕
人の秋眼へ打鍼も文ゝの歳
、かゝく日よ仏も山をかゝれゝ
救免て月れハ考も絶京
、雪流ゝ重の入相
据ゝれ雪茅よ白の君

、川原寺し妹と行して
見る中にも引の弱のつまつひて
、住吉のなれ遊ひも又気守
心恥うし弱のつまつつき
、寺見まハ後姿の能い女
行れらる名は等か僧老の墓
、扱すんて陳子稚子
樂人の供口笛は秋寒し
、花は咲は時ても切と子
いせも紙は金紙産ム土地
、ものの供も夏の秋の霜
三伏は二月あるとあの山
、時多へ鞍ちは雪は嚴は旁
右りは蓮紙左り面枝
、退屈所おとよの右篇歯
いつても多く思の淀板

菜庵

附三句の波うき一
伝とりよるもなく
言点有り歌す
おし句し附所
くてハ言点なし
みこも恨さ句し
分合ってう点
多しおまよ
かるるもなし
京地名　通寄地名
編寄地名　五山の
若根七場の地名

勝朝四

一句五
星ひろ　松は去ふふ風条
所逢ひ　ふ船のうふ
田村川　越すロハ寒さ面ふれ
うし皮　寒の逆のう仁和寺
菜恨よ　菜本寒ふ氏恨主貝
茅ふも　主ふふふ化ふふ孫
通を研　ふふの東山の若法ふ
庵土の　土よ菜ふ寒のめ主一本
子ふハ去　去ふ有松の篇
投ふふし　去興山の八主和菜
新ふ也川の　ふ去法編
造ふふ内　裏へ有ふ伝
様菜ふ　ふふ魂主むふく
後ふふ　ふふふ四社の内田ふく

風雅の人名
金沢多摩の子
雲上
遠国遊女
江口の遊女の名
為迦
余十九編尺余に　うく物

鶯く来さ花も神の玉枝
摩裏う一目三保の浦く
友ら汲くるをりてあるの石
海の上舟とりあ柳よう
濱迦魚ひや小波大磯
岡く汐の来る雀尺生麦
靈あきんて鉤ちつ山
五石くもしれの季公
友も差首の森のしら髪
標咲く陰ま競るのまり擒表
子や梅の末了　苗代
帆柱ま竹浩深へる　星祭
むんと南戸の釣らく旋系
西の廓く夢れぬ坂蕉
三玉敷賀の芸い凧待
友も及ぶなあ級の星夜

萬物庵

撰銘文ゟへし三句
此波寺一之句ハ何ニ
ましく付あんをい
まて惺き句ニ手
极ミ
山形　　未途
京色の句　　馬
風流人名
大和物語つれ半
すくくれつ平城
妙んかる句よし
句をすくと施し

米一馬

お句貝売の営とひかる月の照
環ぬけくすり帰る渡し坊
隣の引　あをとりて居る未来人
抱二琢しさ　子かいりかう子を抱く
泰際し香居遊ま軽の月
霧を押ゆて　罷之　がり馬
標薩令射る弓を立かけて
子ぬと笹田と左右ま引　袖
鶺鴒やる射ろうし橋の渡小初
雛波の梅乃園乃元日
のとりさや古者か丸ハ京テく
窪江の寺れ隠ハ北を言ふ
折角れまてけろりと摩出
女れあくむ髪了　剃刀

和漢出家の人名
二王をとゝしめ唐
宋元明の出家
但人名三句ならべ
ハそれ七句出へし

、皆く八花の梢より移る月
、鶯ひとりは紅色の梅盛
菊暮
、秋の暮ひとりは紅色の梅盛れし
松等は松より尺とられる所付
雑下して子多よか田を起ふれ
第王八人の男尺も糠より行
男は初めそ毛を始より初鰹
、十五山給東の五くとハ
山谷八硯ふるも山住多
、一日三井ちよ嘆く女帝花
、この山住さくれぬ剃髪
仲人も盛深川の村人長
、ふれ子を遠く豆の先
流しへよ多仲蕎の温泉場
舟くも頁に遠徹の寿
見ても下くく弘法の茶

蘿月庵

強和交るべし
付ものゝ井一之
釈 漢語 植物
下ノ句中尺合
へし

山崎銀谷

句旧 地 弘 も月八かゝらぬ
一 よ 庵 葉 よ 秋八なをもり
、新 面の月ちく蔦て色淡し
臼 撓 交て 中れる 蘭 玉
、秋の 雪 鶏の名 石 名ちり
見八 焼 れて人 よ なるち
、茶 施 に 人の 源 切
極 藝の柳を尺ても外尺ても
、あの娘 栗八好ぬり孫きき
男 て ちゝ よ 三井 の茶 外
、玄 れ 夜 よ 実 八 楽器 も 勝 て
松 八 油 花 より 任 ぬ 下 肉 又
、油 乾 て 付 ぬ
茶 の うく さゝく 吹て 秋の雪

一句立

秋田城址日の出路の皮
入唐の知るものとて八月なる

名荷菴

江水徳

前句 寄母ゑ奈良みハ廉の雲を立て
孫 持門八明 店 宮 札
、売 餅 突ま川四下地と尺一ゑ也
布 目のあ 宮 の什一羊 羹
、眼う 恥るものを根の初の江戸
味弟 看板く 方 結 を 賣る
、又 雨 の 降 を 計 る 軍 れ ち 氏
寄 ゑ 志 と ひ て く 蔭 結 み 薮
、佐 ゑ ゑ り 望 う 宮 う 什 の 穴
見 付 志 ゑ や と 吹 氏 石 眠 う
、尚 苔 の 簀 を 京 捻 馬 の 鳴 ゑ み る
章 氏 み り こ と の ら ぬ 瑶 裕
、飯 も 湯 も 流 め と 宮 屋 の 簀 迷 き
痛 ハ そ ゑ う と 投 氏 利 刀

士農工商
けだし作者をして
尺幅の間に
つくさしめ
恩愛世話等
食顔おのづから
いつまでもたえず
神釈意玄常
旅枕山歌多
極物動物季毒
のかずかずも何
もいづれ一句の苦面
ちりちり褒貶

雪ちんと往来も稀な黄昏て
獣　居て　年の古　の紙
、橋形の九曲　女房る歌
好こと上げ　本筆を切る
、先ッ策陶器の藍瓶の泡
拗白の穴へ居れもお自ひ
、歌の多て　ら　貧乏
看経て肩　ちけく火打袋
、走山厠て　迷ふ松むし
千坪く年　三毒の作り　業
、云系ユミ　金れかりや
三川ちと迫　加減の速の爪
、ちしやさえの掃山口先
そ舟ちるる伏尺の麦上る
、ゆ迷も五　敷れ方ハ山原敗
毒の財布　海ちちせ行脚

虚白齋

強弱交る互し
三句の波り句論
釈　左作
意　世話る
おりこの新す
くくとも茅の物
好婿ひる

川路尺

あり智識の教ち子　正　五
釈うれや桃一をいの石三湯
、花園やタくる貧坊
穴を出る日を蛇の元日
、男世常さ云造作る先
庫僧を居るあるして言ふ
禁もせぬ鉄瓶の壷の煮立て
豆腐と化る紙屑の粥
、家ちおとひも松浦佐用姫
赤ふ先さ国あるの五岩流れ来て
、よと欲も稼を居の八居り兼
殖かるくり宮新氣味す
、と ちふの傳が注子先ム子
西行の糞仕組猫やらふとく

目を付て仏〻敬のある大南瓜
祢迦ゝのりんと紅さむむ寺
原原の根と留吉の武り
花子は能走りるこく形ふもや
信正の肉孫は皆稲刈く
ともやと思ふ弥木のぬし
松風こゝく月のくさ数
ふるて聖るさ鶴の浦の秋
西江戸く為を変ても強るる
家祥一日食傷もる
梅〻子を祝く母のぬき足
貸てのち編笠茶屋は新の数
物つ切の結からくと秋の風
赤〻ら迄う其ぬと床上
松四〻汐汲車須戸旧く
殿の板〻左刀う一物

青垣居

十九偏さあ〻る
如〻
諸名おそ〻
奥州　摂州
宮戸川　節
七十二候　作り
植物　軍体
人名　為造
弓　山形
刀鍛　遊芸
生形
おそ比盛の白よ

荒木亀貝

前々おけ〻戻りの早　ひ暁
山吹といて紙布の拾ひ中の
一〻高さ集る十短多は　食
〻混沌〻〻敷乃　神家
ゆれる時鶏舎の尾の井れ柄杓
〻傷西は肉孫は皆稲荷く
〻〻敷さ又もか傷の屋〻て
いま〻〻ハ〻〻ハ〻〻ぬ紋の表
〻萩さもれ石紫さそう袖鉄
古〻奇さ旅れ川を為る
〻尻強の仙春云系媚き〻
〻柏二ノ川馬を変〻〻

付波りまて
軽くたつとあるを
言上を余ハ下ま
風ハ句ま凡合

杉紙と書てかりし赤頭
紀文の金も樋乃こるまを
伐ハ又樹ま皐月の板葺
名よりも狭ひ伊勢の宮居樹
雪化しく雪の方や八幡山
柳ヶ浦へ一門ハ多
石川や蟬常下ま佐し馬
踏哥の聖れ居樹く春
椰の葉ヶ付て樹温多の瓶包
耳ま山の孫乃ね淺
こうも喰陰奥山ま波う春
馬尾蚊足乃伽羅山ン乃松
発ともを東ルハきをこハうく
離乃大長ま常乃春
山の襪の上ま余婦の猫れ反吐
藻の春の波く逃る波物

晴月菴

付ま乃ま一
浩和たく
乃こ言
好恵ま
故人名ハ
言かけし句
下れ句中凡合
ま

篠崎秋天

あ句搗へし塩ま繁く柏子木
陳中へ桑器を高ま聘衣
、弓張く月を干ぎくたくん
親子く外を逐ろ月芽
、既ま句ちん空法塔梅
から〳〵し惟光の名長厠う
、武器多ろ杜輝く
並松ま〳〵うて凄き売賊布
、屋敷ま沼もま海道
ふ一栄のか変高人の高ひ義
、ふ川て涌〳〵の雨
幽見ま〳〵〳〵く〳〵紀
、月ま表前く畑の人奉
和尊の血力洗ま芦の隈

、うしろや世ハ美の浮橋後ろ人
通孔小孝子ゑ智法　俳
、足袋の底さん木賀の秋さび
謡出寸意孝虫もトモカ梨
、壹(サカメ)く戻る通衣のかけおめ
抓つき他阿のお駕へ法く遣せ
一句立鏡しふく遣ゑ野芝居の雨
理乃来てハ口説く新尼
鋼盥踏く扇表　意
心ち気へ関乃字く　通
教あれハ神植ゑも金木立
口上書も赤ひ文紗や
下相ゑ陸く暑き日照面
雨乃日ハ平信の箒振うはくく
童のやく小紙　行学
宮へ納く寿きゑり馬

晦朔庵贈答　石橋一麿

一句立　身を忘し　基盤目もなし見も忘し
日の長京麦府細の長ゑ納く
吉原や女ゑ気きへ長れ説
存の外紀文ゑ加の名メリ
石青の牡丹の白し香炉師子
八舟や不二のうへ七ゑ日市橋
ゑ花ゑ号を三く新孝ゑ三
獨介の作ゑ般度の志し法
祇園舎の奴ゑ白き経ゑへく
三光ハ長ハ田の中の金ゑ
塔法ゑ矣ゑをふくんて居る書
摂く金ゑ法の琴の表ゑよ
すゑ〳〵さゝ亀のうこゝん細流れ
山橋又ちきゑ知ゑ上ハ孝履

和〳〵き方ゑ付原
ちゑ
吉原　牡丹
故契情人名
橋　江戸地名
一句面白く仕立
へ〳〵

五席庵

栖隠　橋本養里

弦和せ
付ま
付ハ
釈　安産薬方
余ハ付方
白中一人合

おろ夜のうちに鞍馬の山を立出て
逆　か　入　仏　乃
、神　俗すものけそや雛の鳴く裁
又小姑ゐ見せるなれきぬ
、我　寿ゐ　寄く山彦
勅かる宮乃色ハ京よる
、の　ちん落るゐ髪のちらい
中の町ゐハ通ハぬ白橋
、入られ者に紅その安を踏く
白の　焼ゐ　髪乃白雪
、素　おぬ人もすゐ義士のち
男ゐ　ハ　ゐて　ゐ　ゐ　敬　屋
、空　ゐ　き　く　行　ゐ　ゐ　祇神　祇山
桔　木　千　年　大　海　の　ゐ

一方ならぬもてなしをうけるきハ形
我孤もうかゝて妖姫のうるめうる
、恵揚へんぢゝ事ぢの事ぢれを
万文、不肖の女生舞
、おいらんと春ゝ美人ゝ美屋ゝ
さうすう老医れこいつ労疲
、風邪ハ夜ゝて去ゝ多
驚ふ、翌ハ子の極ゝく注く
、遠くをこひてかゝる大石
一寺建ニるたゝ五山掛ゝ
、却りひ切ゝてハ張句ぬ門裏
世ゝ師ゝ後ゝ名ゝ古ハ翌ゝ
、蠟燭の火ゝてゝと移ゝる就
をゝのゝ君れ形遣のゝ康
、人ゝの文と怪ゝ眼ゝハ弱骸
橋ゝ上ゝ文表十名

槐陽井鼎之著

俳諧増補所名集

六十余州国々を分ち名所雅名を多く著はす
国々に産物を記し口郡名を正し述べる
古今花叢句を著

同 薄雪庵午心著 句帖紙

雪中紙附合叢句を記

同 眉石著 叢句帖

雪中一派判者は四季の叢句を著

同 持扇

季の詞を述て記月毎の下句を附れば
第之記未之祥・釈・題・山・水・流・恋の詞をもとめ記
俗用小冊 俗式句格古歌・玄・縁・叢句の初字を述

古来庵存義遺稿

此六俗席よりいつの季月何はいづこ
の名所附合抜句を記れを外にいつくとなく
はるる老俗となりて世変古まりあり此六方のを
いろは引きして公一を初とまとめて下句の節
高井蘭山校正著

何ほと新しく注釈を記

季引席用集

日用いろは自身繪

石のうへにも三年かかりて記しるるは小児のまなび
ひとり為に修して語音流通かるを自在ならしめ
をとをとをちびきたしゆ